

「薬剤耐性」とのたたかい 第1回

～医療現場がやるべきこと、みなさんにもできること～

このまま対策を講じないと がんや脳卒中を上回る脅威に!?

現在、日本はもちろん世界レベルの問題として警戒されている「薬剤耐性」。病気を引き起こす病原体が、薬に耐える力を身につけることです。

細菌によって引き起こされる疾患は、コレラやペスト、結核など数え切れないほどあります。これらの病気のほとんどは、原因となる細菌をやっつける抗菌薬や抗生物質によって治療できるようになりました。

ところが、細菌が薬に耐える力を身につけてしまうと、従来の治療薬が効かない(効きにくい)状態になり、治せない病気が増えていきます。このままのペースで薬剤耐性菌が増え続けると、2050年には年間およそ1000万人が、耐性菌による感染症で死亡すると予測されており、現在の“三大死因”である、がんや心筋梗塞、脳卒中を上回る脅威となってしまうかもしれません。

「取りあえずお薬を…」が 薬剤耐性菌を生み出す

薬剤耐性菌が生まれる最大の原因は、必ずしも必要でない抗菌薬や抗生物質を服用する機会が多いことです。

例えば、お子さんが風邪をひいて熱を出しているような時。ほとんどの風邪は、細菌ではなくウイルスが原因なので、抗菌薬を飲んでも効きません。水分や栄養を補給して、数日間経てば自然に治るのが普通です。

しかし、医師が「風邪には効きませんから」と抗菌薬を出さないと、納得できないお父さん・お母さんが多いのではないのでしょうか。医師の側も、風邪



で体力が落ちているところに細菌が侵入し、別の症状が現れるケースもあるので、いろいろな可能性を考え、場合によっては、抗菌薬を処方することもあります。しかし、闇雲に、自動的に抗菌薬を処方してしまうと、攻撃しなくても良い菌まで攻撃してしまうことになるのです。

「菌をやっつけるための薬なのだから、たくさん攻撃した方が良いじゃないか」と思われるかもしれませんが、そうではありません。細菌のなかには、他のものより薬に対して強いものや、薬で攻撃されると、生き延びるため薬への抵抗性(耐性)を身につけようとする「少数派」も混じっています。

細菌同士は通常、多数派と少数派がバランスを取りながら生きているので、少数派はその多数派に抑えられ、細々としか生きられません。ところが、必要ではない抗菌薬を服用し、多数派の菌が大幅に減少してしまうとどうなるでしょう。通常なら細々と生きている少数派が生き残り、繁殖する環境が作られることとなります。これが、薬剤耐性菌が増えている第一の原因です。

薬剤耐性菌が増える原因は医療機関側ばかりでなく、患者さん側にもあります。これについては次号でご説明しましょう。